

魅力あふれる九州の物語



東川 隆太郎

NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会

今年九州で大きな話題となったことの一つに「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の世界文化遺産登録があげられる。

日本の産業革命は、今から約160年前に端を発する。時代は幕末、産業革命を成し遂げた西欧諸国の船が、日本近海に出現する頃でもあった。嘉永4（1853）年6月、ペリー提督率いる米国極東艦隊4隻が江戸湾に来航。それ以前の1840年には中国においてアヘン戦争が勃発し、英国が勝利をおさめていたこともあり、こうした外国の圧力を打破すべく、幕府を含む西南地域の諸藩は自力による近代化を模索しはじめる。幕府はまず大船建造禁止令を廃止、外洋航海も可能な艦船の建造と海軍創設を計画する。日本における海外との窓口・長崎の警護の任にあたっていた佐賀藩は、大砲製造のための反射炉を建造、さらに海軍創設にあたっての人材育成と船の修理を目的とした海軍所を藩内の三重津に開設する。薩摩藩は藩主島津斉彬の下、「集成館」と呼ばれる先駆的な工場群を島津家別邸のあった磯地区を中心にして建設し、大砲の鑄造やガラス製造、さらに洋式軍艦の建造に着手。長州藩も国防強化に力を注ぎ、造船や製鉄、さらに大砲鑄造に動いた。

安政5（1858）年、日本は西欧諸国と通商条約を結び開国、様々な国々の技術や文化が長崎や横浜を通じて国内にもたらされた。日本人の海外渡航に関しては、まだ幕府によって厳しく禁じられていたが、長州藩と薩摩藩は、国禁を犯してまでも直接的に海外事情に触れるべくひそかに留学生を派遣している。こうした積極的な海外の技術導入が進むなか、日本の在来技術も応用させて、鹿児島や長崎などに洋風の建造物が建造されるようになり、また元来海洋国家でもあった日本ゆえに、造船の技術も飛躍的に発展することになる。

外国の圧力に対抗するための近代化には、大量の鉄が必要となる。さらには軍艦や機械の動力となるエネ

ルギーの石炭も大量に必要となる。そこで東北地方の釜石では、西洋式の木炭高炉建造が始まり、大島高任によって安政5（1858）年初めて銑鉄の製造に成功した。明治に入ると、さらに大量の鋼鉄の需要が高まり、軽工業が中心だった日本の製造業も重工業へ移行。そのひとつの到達点が福岡県北部に明治34（1901）年に誕生した官営八幡製鉄所である。こうした重工業を支えたのは、長崎県の端島（通称軍艦島）や福岡県と熊本県にまたがる三池炭鉱などから産出される良質の石炭であった。

こうした「造船」「製鉄・製鋼」「石炭産業」をキーワードにした日本の産業化へのプロセスを表現する遺産群が、今回登録の「明治日本の産業革命遺産」であり、すべての遺産の価値がつながることで非西洋諸国で初めて、かつ植民地化されずにわずか50年余りという短期間で産業化したという世界史上ユニークな物語が成立するのである。そしてこのストーリーには、地理的、歴史的、文化的な九州のつながりが深く関わり、現代に連綿と息づいているといえよう。

東川隆太郎

NPO法人まちづくり地域フォーラム・かごしま探検の会代表理事。「まち歩き」を活動の中心に据え、地域資源の情報発信や、県内及び九州各地でのガイドの育成、まちづくりコーディネーターなどに従事する。講演活動、大学の非常勤講師などを通しての持論展開のほか、新たな地域資源の価値づけとして「世間遺産」を提唱するなど、地域の魅力を観光・教育・まちづくりに展開させる活動に従事している。

【連絡先】 TEL : 099-227-5343

e-mail : info@tankennokai.com